

形成外科

1) 診療科紹介

- 京都市の基幹病院の一つとして多様な疾患に対応。QOL 向上の為に可能な限りきれいに、かつ機能的にも良好な治療を第一とする。過去 5 年間の実績は、年間初診患者数 1000～1100 人、年間手術件数約 600。内訳は、顔面骨骨折手術が年約 20 例、皮膚・軟部悪性腫瘍は年約 30 例、瘢痕拘縮・肥厚性瘢痕・ケロイドは年約 30 例、難治潰瘍・褥瘡・壊疽は年約 30 例、等が主であり、その他は皮膚腫瘍・皮下腫瘍が数的には多い。これらにより専門医受験の為に症例を経験できる。当科は、京都駅前の康生会財団武田病院 (300 床) を初めとした、京都市・宇治市でトータル 1500 床以上の、武田病院グループ全体の形成外科診療も担っている。他方、同じ京都市内に京都大学形成外科があり、見学や研修の移行においてスムーズな移動が可能(当科は京大形成外科の関連施設)。それにより大学病院が得意とする分野の研修も可能。同じく京都市内にある城北病院も同大の関連施設で、当院から見学なども可能。(より詳しくは病院ホームページ、『医者がすすめる専門病院 (ライフ社)』などを参照)

2) 後期研修の為に指導医('08 現在)

- 前田 健志 部長 日本形成外科学会専門医
- 井上 由理 医師 平成 15 年卒

3) 取得可能な専門医

- 日本形成外科学会専門医(の為に研修年数とできる)
詳細は形成外科学会ホームページ (www.jsprs.or.jp/) 参照
'07 年度は日本形成外科学会専門医制度教育関連施設
'08 年度は同・認定施設予定

4) GIO

- 形成外科専門医として患者中心の医療を行う為に、まず基礎疾患や合併症を含めた傷病の把握、要因の分析をする。そして QOL を重視しつつ最も望ましい治療法をチームの一員として考え・行いつつ、それらを習得する。形成外科の基本を学ぶ。

5) SBOs

A) 基本姿勢

- 患者・家族と適切にコミュニケーションし心理・社会的側面を含め全人的に理解。
- 患者を中心とした医療チームの一員として、専門医・他科への適切なコンサルテーション、コメディカルとの良好な連携がとれる。(危険なサイン、不都合な情報ほど

迅速に報告・連絡・相談する)

- 傷病に対し、いろいろな要因を分析・検討できる。
- 一つの傷病に対して複数の治療法を考え、患者の立場に立って比較検討できる。

B) 診察・手技

- 適切な問診、患者・家族との医療面接ができる。
- 患部を客観的に把握・表現（記載・伝達）し検査～治療プランを立てられる。
- 画像診断・検査データを適切に判断できる。
- 傷病に対し、種々の要因を多角的に検討できる。
- 基本的治療法を理解して計画・実施でき、手術後のケア、フォローアップができる。

6) Ls

A) 診療

- 外来診療で診断、術前評価、術後フォローを行う。
- 手術で助手～部分的執刀（指導の下に）～安全簡単な手術の執刀、を行いながら形成外科的手技を習得する。
- 病棟で術後ケアを行い習得する。
- 入院患者を受け持ち治療方法を複数立案し、術中所見によっても変更可能なオプションの術式も考える。
- 形成の週間カンファレンスでそれらをディスカッションする。
- 手術記録・術中所見を詳しく記載し、指導医にチェックを受け、手技の復習・観察のポイント・考え方を学ぶと共に、専門医受験用の資料とする。
- 症例写真を保存・整理し、病院の記録および専門医受験用の資料とする。

B) 学術活動

- 各種カンファレンス・研究会・講習会などに積極的に参加する。
- 日本形成外科学会関西支部会、近畿形成医会、京都形成医会などで発表する。
- 論文執筆（症例報告・臨床研究・依頼原稿などを執筆する）

7) Ev

- カンファレンスなどでディスカッションしながら知識・考え方を磨く
- 形成外科学会専門医の申請要項に沿って、経験症例・手術件数を蓄積する。

8) 大学医局との関係

- 京都大学形成外科の関連施設。同じ武田グループの城北病院(形成外科と皮膚科の専門医が常勤し美容皮膚科診療もある。多種レーザーを備えメディカルエステ併設)

も同様

9) 将来の進路

- 京都大学形成外科に入局し、関連病院などで勤務。(その後再び武田病院グループでの勤務も可能)
- 大学院進学 など